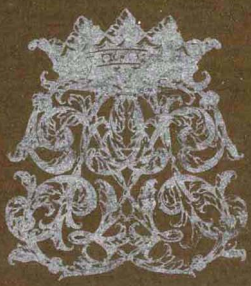

乞食王子

吉田健一

乞食王子

吉田健一

番町書房

乞食王子
昭和五十年三月十五日　初版発行　検印廃止
定価は、ケースとオビに表示してあります
著者　吉田健一
発行者　村川修二郎
発行所　番町書房
東京都中央区京橋三ノ五　〒一〇四
主婦と生活社内　TEL（五六七）〇三一一（代）
振替　東京一五八四四
印刷　松濤印刷株式会社　太陽印刷株式会社
製本　若林製本株式会社

© Kenichi Yoshida, 1975 Printed in Japan
（乱丁・落丁本はお取替えいたします）

目次

発端……11
銀座風景拾遺……13
拾遺……15
おせっかい……17
傍観者……19
無為ということ……21
銀座界隈……24
田舎もの……29
東京……33
田舎と都会……35
理想郷……38
贅沢……40
貧乏……44
再び理想郷に就て……46

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

天国往来……48
天国相手の国民外交……50
もう一つの天国……52
天国から帰った男……54
人の親切……56
ロンドンの乞食……59
スコットランドの乞食……61
宮廷……63
京都の御所……65
死ぬことに就て……67
安心の種……69
口舌の徒……71
文士……73
水増し文化……75

思い出……77
汎水論……80
水の音……82
武器よ、さらば……84
退屈……86
せっかち……88
宴会……90
バーの話……94
地方色……96
日本的……99
戦争の思い出……101
放射能雨……103
文明と野蛮……105
日本の首府……109

都会の憂鬱……111
旅……113
平和論……115
国会と相撲……117
色……119
食べもの屋……122
乞食の思想調査……124
戦後の日本に来たアメリカの中佐……132
天下国家のこと……138
炉辺の幸福……140
家……142
没談国事……144
海坊主……146
沖縄……154

独立ということ……156
琉球料理……159
戦艦「大和」……161
城……163
残虐行為……165
色々と華やかだった頃……167
英国の今昔……169
今の英国……171
今の日本……174
アチラ……176
唐天竺……178
二人の友達……180
主に瀬戸内海に沿って……182
日本のどこでも……184

橋の下で……187
地下室に降りて行く乞食……189
夏と出版と小説……196
講義をする文士……199
ものの見方……203
再び東京に就て……205
昔の銀座……207
昔の方々……213
乞食王子……217

裝幀　安彦勝博

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

乞食王子

発端

妙な題を付けた以上、先ずその説明から始めなければならない。筆者が知っている限りでは、この乞食王子というものが最初に出て来るのは、マーク・トウェーンというアメリカの小説家が書いた「王子と乞食」というのが原題の時代小説で、何でも、十六世紀の中頃に英国の国王だったエドワード六世がまだ王子の時代に、王宮に迷い込んで来た同年輩の乞食の少年と間違えられ、町中に突き出されて仕方なしに、乞食の生活をしているうちに、又好運が廻って来てもとの身分に戻るという話だった。

ここでは、そのような人間を扱う積りでは勿論ない。ただこの、乞食と王子が一人の人間のうちに同居するという考えが気に入ったのであって、例えばその積りでいれば、世の中のことも随分、面白く眺めることができるのではないだろうか。乞食だから、誰にたいして義理を欠くということもなくて、この商売が成立する程度に食うものは食っていれば、明日の米はどうしようかとくよくよすることもない。税金もなければ、借金もない。乞食に金を貸す人間はいなくて、貸せば、乞食にとっては貰いになる。頭を一つ下げれば足りることであ

る。

と同時に又、仮にも王子なのだから、世の中の出来事が凡てどこ吹く風と頭の上を通り過ぎることはなくて、ストライキが起れば仕事が止り、電車が動かなければ勤め人が困るとか、米の統制がなくなりそうになると、それで食っていた役人も心細くなって騒ぎ出すとか、その程度に俗っぽい関心はまだ持ち合せている訳で、偶には残飯を包んだ古新聞も読もうというものである。又寒さが余りひどければ、肉障に取り巻かれて酒のお燗が熱過ぎるなどと御託を並べた王宮の冬を思い出し、余りむさくるしくないアベックを見れば、時にマリエット夫人はどうしたろうなどと追憶に耽ることもあるかも知れない。

要するに、結構な御身分というのは乞食でも、王子でもなくて、その両方を一緒にした乞食王子でなければならず、せめて書いている時だけでもそういう気持でいられれば、時事を語り、世俗のことを扱っても、余りせせこましい感じにならずにすむのではないかと思うのである。又偶には、純粋に乞食の悲哀を描き、乞食になった王子の豪奢な夢を繰り拡げる機会もあるだろうし、そうなればそれだけ材料ができて、回数が稼げる。我ながら、名案だという感じを禁じ得ない。

尤も、ただ乞食王子になった積りで書くだけか、それとも、回数を重ねて行くうちに、ここに乞食王子という一箇の人物が紙上に出現して、その日の貫いが幾らになったかを報告し

たり、昔の家来にそっぽを向かれたりするのかは、これは書いて行って見なければ解らない。書く方も、読む方も、余りひどく退屈しないことを祈るばかりである。

銀座風景拾遺

銀座のみゆき通りの、極く最近まで文藝春秋新社だった建物の脇に細い路地があって、これはすぐに奥の所で突き当りになり、左に行けば並木通り、右に行けばやがて銀座の本通りに出るが、この路地の、前は文藝春秋クラブの入り口があったあたりの一つ先が、どこかの西洋料理屋か何かの裏口に当っているらしくて、地下室に開けた窓から色々な料理をしている実にいい匂いが漂って来る。カレー・ライスを作っている食堂の横を通ると、カレー・ライスというのはどんな旨い料理なのだろうかと思うような匂いがするのは誰でも知っているが、それがこの西洋料理屋の裏ではカレー・ライスだけではなくて、チキン・ライスだの、オムレツだの、それどころではなくてソール・ボン・ファムだとか、ウィーナー・シュニッツェルだとか、シュプレム・ド・ラニョー・ア・ラ・シルカッシェンヌだとかいう、お客になって注文するのはいつの日のことか解らない匂いがごた混ぜになって昇って来るのだから、

表に廻って客になりたくなり掛けても不思議ではない。

同時に、そこの台所の熱気も外に逃げて行くから、その辺はぽかぽかと温くて、窓の近くに腰を降して残飯の包みを開くと、それだけでもう豊かな感じになって、手摑みではなしに偶には箸の二本も使って見たくなる。併しなければないで構わない。一口、口にほうり込んで、その時の匂いによっておかずは今日はグーラッシュ・ア・ロングロアーズだとか、ただのビフテキだとかいうことにして食事を進める。右手の動きは自然に悠長になり、包みを持っている左手もいつもよりは華車に見える。がつがつ食べるのは、それだけ腹が減っているからだという説もあるが、腹が減っているからには違いなくても、そういう時に貧弱な食物が少ししかないと、がつがつして食べなければ食べた気がしないのである。米の飯が山と積まれた前に坐れば、空腹が満されないうちに余裕が生じ、一口毎に体が痺れる程の美味ならば、結果はやはり同じで動作は緩慢になる。

つまり、がつがつ食べるのは、量と、調味料と、料理人の腕前の不足を補うためなので、この西洋料理屋の裏で残飯を摘めば、そういうことをして気を紛らせる必要はない。衣食足って（は少し大袈裟だが）、足りるのが当り前だった頃の礼節を思い出す。ゆっくり食事を終って一粒も残さず、通行人もあることだから、楊枝代りにマッチを折ったのを使わず、ずだ袋の底を探せば、煙草の吸い殻が出て来る。空き腹に煙草を吸って眩いがするのも捨て難

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo